いとちりの

防災教育にGIS

Geographic Information System

SERIES 2-7

第7回

「大火災」から下町を守れ
—東京都墨田区—

静岡県立富士東高等学校　伊藤　智章

写真1　東京都立慰霊堂

写真2　東京都立復興記念館入口

はじめに

東京23区の東部，隅田川の両岸から千葉県境の荒川・江戸川までのエリアは，西の「山の手」に対して「下町」と言われ，庶民の町として小説や映画の舞台にもなってきたところです。その入り口に位置する墨田区は，両国国技館や東京スカイツリー，江戸東京博物館など，外国人観光客にも人気の高い場所でもあります。一方で，関東大震災や東京大空襲による大火災で最も多くの方が亡くなった被災地でもあります。

関東大震災で焼失した範囲トレースして「地理院地図」上に重ね合わせた地図を作成し（**図1**），ゆかりの地を巡検してみました。2時間もあれば回れるコースですので，ぜひ歩いてみていただきたいと思います。

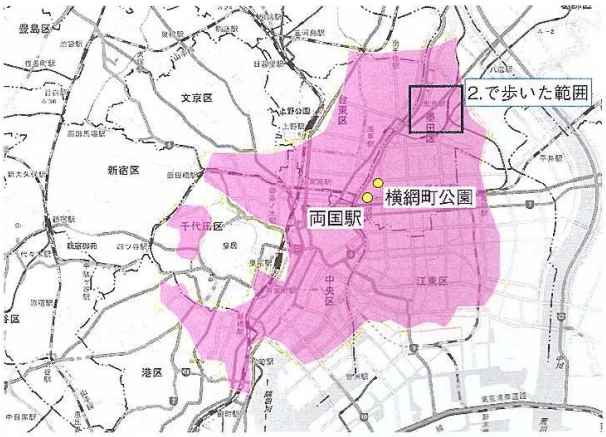

図1　関東大震災による火災焼失範囲(1)　（内閣府Webサイト「防災情報のページ：過去の災害に学ぶ22」掲載図より作成）

1. 横網町公園～関東大震災最大の被災地

JRの両国駅を降りて両国国技館を横目に東へ10分ほど歩くと，緑豊かな東京都立横網町公園に入ります。木立の間から鉄筋作りの三重塔と慰霊堂を横目に見ながら東京都復興記念館に入ります（**写真1・2**）。

この場所は，1923年（大正12年）9月1日に発生した関東大震災の後に起きた大火災で，最も多くの死者を出した「旧陸軍被服廠（ひふくしょう）」の跡地にあたります。関東大震災での死者数10万5385人のうち，火災による焼死者は9万1781人（87.1%）と言われていますが[1]，焼死者の4割にあたる約3万8千人の方がこの場所で亡くなっています。

「今昔マップon the web」で当時の地図を見てみましょう。**図2**は，**図1**で示した火災焼失範囲の背景地図を1917年（大正6年）に代えたもの，**図3**は旧陸軍被服工廠跡地の地図の今昔です。旧版地形図は大正6年測量のもので，陸軍被服廠（軍服などを作る工場）が存在しています。被服工廠が移転したのは震災発生1年前の大正11年（1922）年で，工場跡地を公園にするために東京府が買収し，震災当時は建物も木もない広大な更地だったそうです。被服廠の南に「りやうごくばし」（両国橋）駅が読み取れますが，鉄道は現在と違いここで行き止まりでした（鉄道が隅田川を渡り，御茶ノ水駅まで延伸されたのは1932年）。

震災直後，10.3 ha（20,430坪）の広大な敷地に集まった避難民は推定約4万人と言われています。荷車に家財道具を

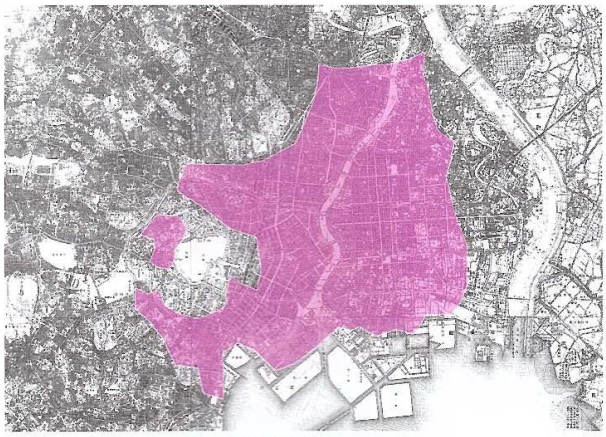

図2　関東大震災による火災焼失範囲(2)
背景地図は1917年（大正6年）

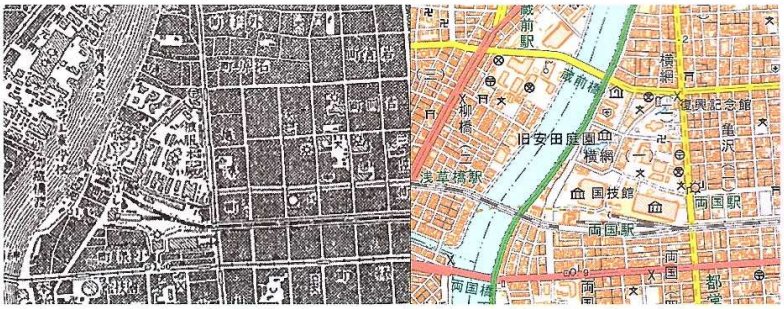

図3　両国駅付近の新旧比較　左：1917年（大正6年），右：地理院地図

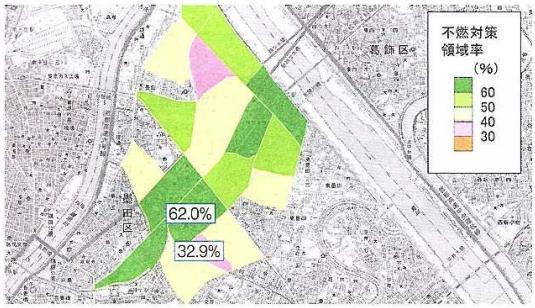

図4　墨田区の指定地域ごとの「不燃化対策領域率」
不燃化対策領域：空き地＋鉄筋建物など燃えにくい建物に改築された場所

積んで集まった人々は避難した安心感からか思い思いに談笑し，冷たいカルピスを売る屋台も出たと言います。そこに周辺の火災現場から発生した強烈な熱風（火災旋風）が襲いかかりました。人々は両国橋に殺到し，火に追われた人，川に飛び込んだ人の多くが犠牲になりました。

震災後，この場所に「東京府震災記念堂」が設置され，その付帯施設として昭和6年（1931年）に復興記念館が建てられました。昭和26年（1951年）に東京大空襲で亡くなった身元不明者の遺骨約5万8千柱を合祀して「東京都慰霊堂」と改称して今日に至ります。

2. 火災リスクが高い地域を歩く

復興記念館から北東に歩いて約15分，東京スカイツリーを過ぎたあたりから東武鉄道の曳舟駅にかけて，住宅密集地に入ります。この地域は，国土交通省が2012年に発表した「地震時に著しく危険な密集住宅地」に指定されたエリアの一つです。**図4**は，墨田区内の指定地区ごとの「不燃化対策領域率」を示した地図です。全国197地区（5,745ha）の指定地域のうち，東京都は最も多い113地区が指定され，指定面積の29.3%を占めています。うち墨田区は19地区と都内2位（1位は品川区で23地区），指定面積は389haで1位です（**図5**）。

東京都では2012年（平成24年）から「木密不燃化10年プロジェクト」を行っています。都内の21区53地域を「不燃化特区」に指定し，老朽化した建物の解体や立て替えの際の設計費の助成，固定資産税や都市計画税の減免を行う制度です。墨田区は先行実施段階から指定を受けており，都内の他の地区に比べると不燃化対策領域率が高い地域が目立ちますが，対策が進んだ地域とそうでない地域がはっきりと分かれているのが特徴です。実際に現地に足を運ぶと，狭い範囲のなかで，建物の形や古さがはっきりと違う場所を見ることができました。例えば，曳舟駅の南側ではタワーマンションや大型ショッピングセンターが占めているのに対し（**写真3**），200m南に隣接する地区では道幅の狭い路地と老朽化した建物を見ることができました（**写真4**）。

3. まとめ

発生の可能性が指摘されている「首都直下型地震」に備える上で何より大切なことは，過去に実際に起きた災害を可視化し，空間的な広がりを実感していくことだと思います。「関東大震災」では，避難民も，そこに誘導した警官や行政職員も「安全」であると信じて疑わなかった広場で惨劇が起こりました。1995年の阪神淡路大震災では，倒壊した住宅が道路を塞ぎ，防火用水が得られない状態で救助ができないまま猛火に見舞われました。

急激な変化が起こる一方で，そこから取り残されたかのように存在する古い町並みとのコントラストは，大都市ではよく見られる光景ですが，東京の下町は，その濃淡の濃さ，地域的，歴史的な知名度において群を抜いた存在です。生徒は誰でも知っている「東京スカイツリー」，一度は聞いたことがある「関東大震災」を取りかかりに，歴史ある巨大都市が抱えている災害のリスクや都市のあり方について考える授業を組み立ててみてはと思います。

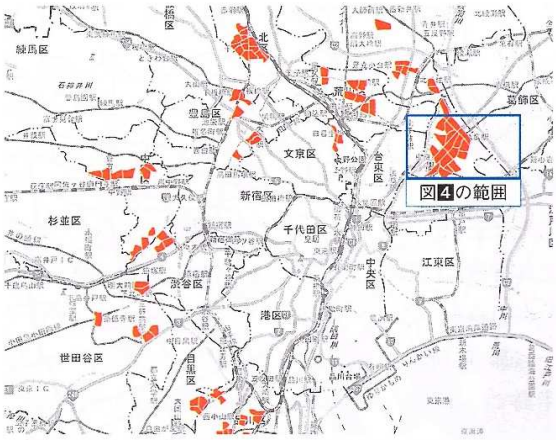

図5　東京都内の「地震時に著しく危険な密集住宅地」の分布
（国土数値情報「密集市街地データ」より作成）

写真3　曳舟駅南の住宅街から駅前のタワーマンション群を望む

写真4　路地の間からスカイツリーを望む